優陀那日輝における排仏論に対する姿勢

宮　川　一　敬

近代日蓮教学の起点と仰がれる優陀那日輝（一八〇〇～一八五九）は、幕末の激動した上下混乱の中で、時代思潮に適応した新宗学の樹立を計り、金沢の立像寺に学舎「充治園」を設立し、門弟の教育にその生涯を閉じた。

日輝の活躍した約四十有余年は、西欧の近代学問の輸入による合理主義、また医学の輸入による科学的思惟と現実主義、諸外国からの貿易の要求による開国問題等。一方当時の仏教界は「寺請制度」によつて幕藩機構に組し、経済的にもその基礎を確立していた。しかしそれがために僧侶の精神的頽廃が目立つ様になり、各方面から仏教批判を余儀なくされていたのである。

江戸時代における排仏論は、先ず禅宗寺院に従属し育されてきた儒教を、幕府が官学として採用して以後、仏教より脱して独立し、幕藩体制の政治理論として確立するや、仏教の出世間主義に対する非倫理性を、現実主義の立場から創唱するに至つた。他方、神葬祭を因に神仏習合を批難する神道側、幕藩体制の矛盾より生じた、寺領の非生産性による損失を強調する経済学者、古典学的研究に力を注ぐ国学者等の批判を挙げる事が出来る。特に科学的思惟方法の成長にともなつて批判的精神が生じ、文献学的見地から富永仲基の『出定後語』、服部天游の『赤倮々』、更に『後語』の影響を受けた平田篤胤の『出定笑語』等の、大乗非仏説論の出現をみるに至つたのである。

かかる排仏論書に対し、玉沢の学徒桓叡日智（一八一九～一八五四）は、日輝にその反駁を求めた。日輝は『学仏具眼鈔』、『庚戌雑答』、『護法知時論』等を以つて日智に応えたのであるが、日輝が『出定笑語』の出現に最も関心を寄せていた事については、『庚戌雑答』に

平田大学ノ出定笑語ハ未ダ刻行セズ、此ノ書出定後語ニ勝ルル事一倍、卓見激論尤モ甚シ。[1]

更に『学仏具眼鈔』においては、

彼ノ出定笑語ハ疑テ不レ決ル者ナリ、惣ジテ儒者国学者ハ、皆教ノ虚談ナルヲ知ル、然ルニ其ノ家ノ学ニアラザル故ニ、理実ノ義ハ勿論其ノ教ノ虚ナルヲ云モ、委悉ニハ不レ見不レ知也。[2]

更にまた

於レ此乎儒者国学者ノ赤倮々。出定笑語等ノ治病ノ真薬出ツルアリ。然ルニ不学ノ宗徒未熟ノ学者。忙然トシテ猶ヲ未ダ困夢ヲ醒マサズ。[3]

等と論じ、『後語』にも勝れた『笑語』は、不学の徒の覚醒の真薬であり、近来の排仏論書の流行、身延山の二度の妖災、水戸の毀仏廃寺等は、全て仏教徒の誠慎すべき事であると言及し、『教観進退略鈔』では、

我宗昔来折伏ニ執スルヨリ。我慢卑俗ノ悪習風アルヲ以テ。王候士太之ヲ嫌忌スル事多シ。就中天文ノ乱。安土ノ問答。大佛供養不受不施ノ諍論ナンドハ。最モ弊風ノ極ナリ。[4]

と論じ、『出定笑語』の附録、「神敵ニ宗論」の所論を取上げるに至っている。こうした状況から、篤胤の『出定笑語』に対応して、日輝は『妙宗円通記』を著わしたと推察する事が出来るのである。即ち、『笑語』における批判内容からみて、『円通記』の章節の構成と内容が、『笑語』に共通して対応している点である。この様な対応のしかたは、「日輝の著述の目的は対外的な意味よりも、対内的な充治園教学の樹立にあつた」[5]ことと、折伏を廃して摂受に徹底した、日輝の特色ともいえる。

さて『出定後語』等に代表される大乗非仏説に対し、『庚戌雑答』では、

若シ夫レ作者釈尊ニアラズトモ。経文ニ順ジテ釈尊ノ説トスルニ何ノ不可アラン。経ハ作者ニハ拘ハラズ唯ダ其理ノ勝ルルヲ取テ可ナリ。[6]

と論じ、非仏説を実質的には承認しつつも、法の勝義による、宗学者としての信仰主体の立場を明らかにするとともに、仏典における虚談等は否定せず、道理による思考を強調したのである。

一方、『出定笑語』や儒学者等からも指適せられた、酒色に溺れる僧侶の乱行不法なる行動に対しては、『護法知時論』を著わして、僧風の訓誡を具体的に呈した。これは日輝自身が人格的に敬慕した、深草元政（一六二三～一六六八）によるところ大であったであろう。本書において日輝は、酒は人情を安慰にするもので、宗祖以来先師の許すものであるが、節制するもの。また婬肉の二楽から離れる変りに、出家者の五楽の徳を説き、学問、芸能を奨励した。これ等は学舎の規風ともいえるものであるが、広範囲に亘る排仏論の対処の姿勢を子細に物語っている。

他方、日輝は儒学、国学の隆盛にともなう排仏論のなかで、長い年月を経て一番苦慮していた問題は、儒教対策であった。「儒仏ノ優劣予之ヲ憂ウルコト千レ今三十余年。近年ニ至テ漸ク安心ヲ得タリ」と述べたのは、日輝五十一才の時である。その対策は『仏法元略』にまとめられ、「仏法専論ニ解脱道ノ。儒教専論ニ治国道ニ」と二教の相違を規定しつつ、相補って両立すると力説している。また更に一歩押し進め、「儒可ニ以資レ政。仏可ニ以安レ民。古学可ニ以不レ忘レ本矣」[7]と三教の役割を明らかにし、『庚戌雑答』にいたっては

若ハ仏若ハ儒若ハ国学各ソノ長ズル所アリ。何ゾ一ヲ是トシテ他ヲ非セン（中略）泰平ノ時ニ順ジ文華ノ風ヲ守リ、各家ノ正道ヲ以テ教法ヲ宣明スベキナリ。[8]

と、各のその利点を採り、排他自尊を誡め、神儒仏の三教が協力すべき事を強調し、「三法差別ありて差別なし」[9]と論じて、三教の無作別観を立脚したのである。

かかる排仏論の燃盛るなかで、啓蒙運動を唱導した日輝は、天文法難以後の教団に対する弾圧と、不受不施の禁令、並びに寺請制度のなかにおける布教方法の困難さを痛感し、『立正安国論』の非現実性を打ち出すにいたった。ここに日輝の批判される一因があるのであるが、時勢に適応した教団の布教方法の再生と、向上を希し、摂受の実践を展開したところに、日輝の排仏論に対する姿勢の一端をみる事ができるのである。

1 『充治園全集』四巻、夏三七一。2 同巻、三五五。3 同巻、三六〇。4 同巻、三四二。5 『大崎学報』一一八号「優陀那日輝の著述とその成立」。6 同巻、三七二。7 同巻、三八八。8 同巻「妙宗破無明論」四〇九。9 同巻、三七五。10 同五巻、「妙宗円通記」十五。